

渋沢敬三を敬慕した近藤雅樹さん（渋沢敬三を顕影）

著者	須藤 健一
ページ	29-31
発行年	2014-12-03
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008399

渋沢敬三を敬慕した近藤雅樹さん

須藤 健一

特別展「渋沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Artic Museum」の開催を前に近藤雅樹さんが、「渋沢さんへの恩返しのためつもりで頑張る」と話してくれたのを思い出す。

館長に就任した二〇〇九年の秋には、保谷（現西東京市）で催される「民族学博物館発祥の地」銘板の除幕式で挨拶してほしいと近藤さんに頼まれた。「保谷はわれわれの博物館の母体があったところじゃないか。何としても駆けつけないと、ご先祖様にあわせる顔がないよ」。この私の答えで、近藤さんは渋沢敬三と国立民族学博物館との歴史を大事にする私の考えをよみとり、ほっとしたと除幕式の報告書に書いている。

渋沢敬三は一九三九年に保谷の地に日本民族学会附属民族学博物館を開設した。今はないその博物館の証として銘板設置を企画したのは、「高橋文太郎の軌跡を学ぶ会」（代表・高田賢）である。高橋文太郎は保谷出身のアチック・ミュージアム同人で、博物館の敷地の一部を提供している。

除幕式には、渋沢敬三の長男渋沢雅英さんと長女の佐々木紀子さん、次女の服部黎子さんをはじめ、西東京市長や多くの研究者と市民が参列した。その後、渋沢雅英さんが「父、渋沢敬三の仕事」、近藤雅樹さんが「渋沢敬三と民族学博物館」をテーマに講演した。近藤さんは、渋沢敬三の民族学・実業史・延喜式などの博物館建設の夢と民具研究の現在を熱く語り、民博での渋沢資料整理の苦労話も披露した。

私はこの時初めて渋沢雅英さんにお会いし、初代館長梅棹忠夫が「渋沢敬三先生の遺言で現在の民博が生まれました」と雅英さんにお礼を述べたことを知った。日本民族学会を設立した一九三〇年代以降も学会支援を惜し

まず、民博創設へと導いた洪沢敬三の偉大さに思いを新たにしたい。

近藤さんは、民博に移管されたアチックの標本資料、約二万一〇〇〇点の整理と正確な記録化を洪沢敬三研究の一環として進めてきた。民博の共同研究のほか、一般財団法人MRAハウス（理事長・洪沢雅英）の支援で研究会も組織した。この研究会には洪沢雅英さんも参加し、アチック資料の現在や洪沢敬三没後五〇周年記念事業として開催する特別展などについてもいろいろ議論した。

ここに、近藤さんが私の特別展での挨拶にとしたためた一文がある。洪沢敬三の人と学問と博物館についての近藤さんの思いの骨子がつづられているので掲載することにした。

洪沢敬三（一八九六～一九六三年）は幼少時から、一日中、庭の一隅にある潮入りの池で、東京湾の潮流の干満とともに出入りする魚や小さな水生生物を飽きずに眺めていました。生物学者になることが夢でした。しかし、実業界に身を置く祖父栄一（一八四〇～一九三一年）の偉業を継ぐことになり、大学では経済学を学びました。

銀行員となった洪沢は、民俗学や水産史の調査研究を行うために、親しい仲間たちと研究団体を組織しました。その拠点が自邸内の物置に設けた小部屋です。それを「アチックミュージゼム」(Attic Museum)、屋根裏部屋の博物館と名づけたのです。

最初の研究は張子の達磨でした。それから、庶民の生活用具の収集と調査研究に向かいます。洪沢はこうした資料を「民具」と名づけました。そしてアシナカ（足半草履）の研究にとりかかります。その研究は、洪沢と若い研究者たちが進めた本格的な共同研究でした。それ以降、民具研究から周囲諸民族の物質文化の収集と比較研究、さらには異分野が連携する総合調査へと研究領域をひろげ、独自の学問を形成しました。

洪沢は一九三六（昭和十一）年に国立の「民族学博物館」設立を国に建議したが実現せず、自ら保谷に博物館を建てたのです。そこに、研究同人たちと集めた民具を展示しました。それから三五年後に誕生した民博は、アチックミュージアムの民具と民具研究の思想を受け継いできました。屋根裏部屋の博物館が民博の原点なのです。

近藤雅樹さんが担ってきたアチック資料の整理とデジタル化は道半ばであるが、その遺志を受け継ぎ、民博はそれをも組み込んで文化資源に関する情報を国内外に発信するバーチャル・ミュージアムの構築を進めている。